

スノッブ女を笑う

—イーディス・ウォートンの“Xingu”—

野末紀之

1

Edith Wharton の短篇集 *Xingu and Other Stories* (1916) の冒頭におかれた“Xingu”は、知的スノビズムへの諷刺がたえず笑いを生みだす異色作である。出版直後の書評は、まじめな女性への戯画が過剰であり人間味に欠けるとする一紙をのぞけば、概ねその諷刺の愉しさを指摘している。¹ ウォートン研究でこの作を論じたものはこれまでないようだ。たんなる偶然なのか、作品が軽すぎるのか、それとも上記一紙の評のようにユーモアに欠ける研究者が多いのか—理由はわからない。けれども、その卓抜な笑いの手法においても、女性作家によるスノッブ女の諷刺という刺戟的なテーマにおいても、無視するには惜しい作品である。その諷刺の特質について論じてみたい。

Mrs. Ballinger は「ひとりで立ち向かうのは危険であるかのように群れをなして教養を追いかける婦人のひとり」(209)で、田舎町に Lunch Club をつくって冬季に活動している。² 会員は女性ばかり六人、活動内容は有名文化人との会食および会話を通じて相互の教養を高めることである。つぎの会合に作家 Osric Dane を迎えるにあたり、クラブは彼女の小説 *The Wings of Death* をとりあげ議論する。メンバーは「自分の意見を述べるか、他人の意見でよさそうなものは自分のものにするかできた」(210)。しかしクラブの落伍者たる Mrs. Roby は肝腎の本を読んでおらず、逆に時代おくれの Trollope を好んでいることなどが判明し、さらに評価を下げる。歓迎の日、デインは強制されて来たといわんばかりの態度をとり、質問をはぐらかし、言葉尻をとらえた問いを返して歓迎気分を台無しにする。急場を救ったのがロビー夫人である。とりすましていたデインはロビー夫人の発した“Xingu”という奇妙な言葉にうろたえるが、やがて人間味を示しさえする。ほかのメンバーもだれひ

とりその意味がわからなかったが、無知の露呈を恐れ、手探りしながら口をあわせる。話題が小説の話になりかけたとき、ロビー夫人はトランプの約束を口実にその場を立ち去り、デインもあとを追う。残されたメンバーは“Xingu”の解釈をめぐって紛糾するが、百科事典によってそれがブラジルの「シンダー川」だと知るや、自分たちを愚弄したロビー夫人の脱会要求を会長に迫る。

テーマおよび笑いの手法において、この作品が古典落語との共通性をもつことをまず指摘しておきたい。「やかん」「転失気」「酢豆腐」「つる」などの知ったかぶりを笑う噺、とりわけ「転失気」が想起される。この噺は、病気の和尚が医者「転失気」(てんしき=おなら)という言葉を知っているふりをしたため小僧の計略にはまるというものである。³ 医者から意味をきいた小僧がわざと和尚に「転失気とは飲酒用の器のこと」と知らせるので、和尚は医者たちとちぐはぐな会話を交わし、恥をかくことになる。知者たるべきひとの無知と偽善が笑われ、無知なひとの率直さと知恵が賞揚されるという逆転のモチーフがうかがえる。この噺には知ったかぶりをする花屋も出てくるから、全体の構図は「無知を恥じぬ無邪気な子ども」対「無知の露呈を恥じて知ったかぶりをし、かえって恥をかく大人」である。子どもは知ったかぶりをする大人を戒める役割を演じるのである。同様にロビー夫人もスノッブ女たちへ一種の訓戒を行なう一しかも、落語の常套手段である言葉遊びを駆使することによって。加島祥造は『アメリカン・ユーモア』のなかで、子どもや無邪気な人々の目が周囲のスノッブを笑いものにする文学の系譜にふれている。⁴ ロビー夫人はそのような人たちの一員である。もちろん、この作品と落語との類似は洋の東西を問わぬ笑いの普遍性からくる偶然の産物であろう。

「転失気」という言葉が中国の古典医学書(『傷寒論』)に由来するのにたいし、ブラジルの川の名は「学識を追い求める不屈の女狩人たち」(209)の盲点を突く。百科事典を引くとき Miss Van Vluyck は Z の項から調べている(Century Dictionary は“Chingu”という綴りもあげている)。「転失気」に相当する言葉は、ロビー夫人の無知が暴露されるエピソードに登場する“pterodactyl”であろうか。彼女は生物学の知識を見込まれてクラブへの入会を認められたにもかかわらず、ヴァン・ヴリュック嬢の口にした“pterodactyl”(=winged reptile)というギリシャ語起源の言葉を韻律

(meters)の一種と勘違いしたことから信用を失ってしまう(210)。“dactyl”には「長短短格、強弱弱格」の意もあるので、夫人の誤りは嘲笑されるべきものではない。またクラブのメンバーにとって「翼手竜」は教養形成に貢献するというわけではなく、メンバーの差別化に役立つにすぎない。他方、“Xingu”は知的分析の手を逃れる言葉である。この「文化的後進地」の川の名は、綴字から語「源」へと川のように遡ることができない。自分たちは「どんなものであれ最高の芸術、文学、倫理学にふれようとしている」(216)との矜持をもつランチ・クラブのメンバーたちがこの語を知らないのは無理もない。

ロビー夫人が“Xingu”という言葉を選んだのは、かつてブラジルに滞在した経験による。前回の会合で夫人は、ブラジルでの船上パーティで物を投げあう遊びに打興じ、デインの小説 *The Supreme Instant* を水中に投げつけたことがあるというエピソードを語り、メンバーの顰蹙をかっていた(210-11)。タイトルの“Xingu”には、知的分析にたいする肉体運動、まじめにたいする遊びといった笑いを生み出す仕掛けまでも含意されていることになる。すると、真相を知ったバリンジャー夫人の“*But it's too ridiculous!*”と Laura Glyde の“*It's too preposterous*”(226)という台詞—いずれも「ばかげている」という意味—は本人たちの意図をこえて意味深く聞こえてこないだろうか。つまり、ロビー夫人は自分とメンバーとの立場を「転倒」(preposterous)させることで「笑うべき」(ridiculous)状況を生み出したのである。まえの会合で彼女はプリンス夫人に読んだ本の感想を尋ねるが、その質問は“out of order”(212)とされていた(文脈上は「ルール違反」の意)。いまロビー夫人がデイン歓迎の席を立ち去ることがわかると、ほかのメンバーはこう考える—「彼女がいなくなれば、これからはじまる議論に秩序と品位が大いに回復されるだろうし、いっしょにいと奇妙にもいつも生まれる自己不信の念が消えるだろう」(221)。有關階級の女性の「秩序と品位」(order and dignity)を崩壊寸前に導き、彼女たちに「自己不信」(self-distrust)を突きつける存在—ロビー夫人はトリックスターの性質をもっている。しかし、彼女のふるまいによってランチ・クラブが活性化し、スノビズムを脱却することはなさそうだ。クラブは、「スキャンダル」(228)をもたらした張本人を排除しようというのだから。

盲点を突く言葉を選択すれば優位を確立することはたやすい。スノビズムにとらわれたメンバーがみずから墓穴を掘ってくれるからである。とはいえ、ロビー夫人の戦略が巧妙をきわめるのもたしかである。彼女は冷静で怯むことのない態度、それに二重の意味をもつ表現を武器にその場を支配する。それは、パリンジャー夫人の“we have been so absorbed in—”“We’ve been so intensely absorbed in—”という台詞のあとに“In Xingu?”と言葉を添えることから始まる(217)。ほかのメンバーたちは「うろたえた視線を交わし、いっせいに安堵と疑問の入り混じった凝視を救いだしてくれたひとにむけた」。デインは「あきらかにとまどっている表情」で「頭の奥の何かを手探りしている顔つき」をみせる(217)。ロビー夫人のいうのは「Xingu に夢中になっている」ということだが、おもしろいのは言葉の比喩的側面が表面にあり「シンガー川に吸い込まれる」という物理的意味が背後に隠れることである。このことは、“[Some] people say that one of your last books was saturated with [Xingu]” (218) についても “[We’re] dreadfully anxious to know just how it was that you went into the Xingu” (219) についてもおなじである。前者を聞いたメンバーたちが「そうだったのか!」と確信するのは、「ある主題がデインの本のすみずみまで浸透していた」と理解したからであり、後者の場合は「デインがあるテーマに没頭した」と受けとったのである。デインとの話の文脈に支配されてどうしても見えなかった「本が水浸しになる」「本が川に落ちる」という物理的意味は、“Xingu”の真意が判明したときメンバーの念頭にはじめて浮上することになる。

メンバーたちはわずかなヒントを手がかりに“Xingu”の真意をつかもうとする。ロビー夫人がデインに、肝腎なのは“Xingu”だと皆思っているはずですよという、無知が露呈しないように、またデインへの対抗意識からも、何人かはロビー夫人に調子を合わせて“Xingu”の価値を強調する。グライド嬢は、“Xingu”のせいで「人生がすっかり変わった例を知っている」と述べ、Mrs. Leveret はそれが「大いに役立った」とし、ヴァン・ヴリュック嬢は「こういうテーマに時間を惜しむなんて想像もつかない」と語る。いずれもあとになって大仰で的外れであったと判明する台詞である。直後にロビー夫人が「深いところも

ありますし」(deep in places)「飛ばすことはなかなかできません」(it isn't easy to skip)という、ほかのメンバーたちは「すると本だったのだ!」と内心で声を上げる(219)。メンバーたちに確信できるのはここまでである。主役が立ち去ってから彼女たちは各自の読みをおずおずと示すが、それらはグライド嬢が「儀式」(223)、プリンス夫人が「慣習」(223)、ヴァン・ヴリュック嬢が「言語」(224)と一定しない。いずれにせよ、メンバーたちの読みの滑稽さは、「シンダー川」「川に落ちる」という言葉の物(理)的側面を見逃し、わざわざ「深いところ」を手探りするところにある。そういえば、プリンス夫人とグライド嬢はそれぞれこう述べている―「わたしたちは薄っぺらな読者ではありません」(217)「わたしたちは行間を読むことができます」(223)と。彼女たちがロビー夫人に翻弄されないためにすべき読みはむしろ、幼児のように言葉の物理的意味をありのままに「薄っぺら」に受けとることであった。

バリンジャー夫人はロビー夫人の台詞に調子を合わせたことで、その言葉の二重性にいわば感染してしまう。「私なら苦勞してすすむなんていわない」というバリンジャー夫人の言葉にロビー夫人が「あら―いつもスムーズにいくと思ったのね」(you always found it went swimmingly)と応じると、会長は答える―「もちろんむづかしい箇所はあるわよ」(Of course, there are difficult passages) (219)と。彼女は“Xingu”を本と思ったのである。だが、結末でグライド嬢はこの台詞を思い出して「いい、ロビー夫人のせいであなたはシンダー川を難なく泳いで行ったと口にしたのよ」(you know she made you say that you'd got on swimmingly in Xingu)と会長を問い詰める。グライド嬢の記憶は不正確なのだが、しかし不正確にせよ呼びだされ突きつけられた自分の言葉はバリンジャー夫人を恥入らせ、ロビー夫人の退会要求を決意させることになる。自分の言葉が予想もしなかった意味と効果をもっていたことにはじめて気づくのである。

バリンジャー夫人の台詞のあと、ロビー夫人の曖昧な言葉にメンバーが深読みを行なう傑作場面が出てくる。プリンス夫人の「元を理解しようとしたことはありますか」という問いに、ロビー夫人は少し間をおき、視線を落としてこう答える―「いいえ―でも友だちがやってみました。とても頭のいい男のひとです。彼によると、そうしない方がいいらしいですよ、女性は一」(220)。レヴェレ

ット夫人は煙草を渡そうとしている女中に聞こえないように咳払いをし、ヴァン・グリュック嬢とプリンス夫人は不快な顔つきをする。この反応は現代の読者にはわかりにくい、彼女たちは「元」(source)を「いかがわしい原典」(ポルノグラフィー)とでも考えたのであろう。あとでプリンス夫人はこのやりとりを思い出して「川のどこがはしたない(improper)というのかしら」「源流のことを淫ら(corrupt)といていたでしょ」と述べる。グライド嬢がこれを訂正し「淫らではなくてたどり着くのがむづかしいということよ」「源流探検は危険だと事典にあるでしょ」といい、バリンジャー夫人がロビー夫人の船上パーティでの一件を持ちだして先刻のやりとりを再構成してみると、一同は「言葉も出ない」(inarticulate)状態に陥る(227)。自分たちがいかに愚かで滑稽な読みを行っていたかを思い知らされるのだ。しかし、真の反省がやってくることはない。

つけ加えておくと、プリンス夫人は、「エレウシスの神秘儀式」というグライド嬢の言葉を耳にして「下品なことはいわない約束でしょ!」(224)と注意している。異教の祭りに淫蕩な場面を想像したからであろう。エロティックなもの、あるいはエロティックだと思うものに過敏に反応し、これを道徳的に封じ込めようとする「想像力豊かな」女たち—知的スノビズムのもつ性のヴィクトリアニズム(上品ぶり)が諷刺されるのである。

メンバーの深読みは必ずしもロビー夫人の言葉にうながされたものではなく、スノッブ女にとりついた病の様相すら呈している。ヴァン・グリュック嬢は、無知なロビー夫人が生物学の男性教授の推薦—すこぶる「気立てのよい女性」(210)という言葉—を得たのは「教授に媚びたか、さもなければ髪型のせい」(210)と決めつけている。社会的地位のある男が無知な女を推奨するからには「気立てのよさ」以外に何らかの事情があるにちがいないというのである。なるほど現実にそういうことはあるにしても、ここで揶揄されるのはそうした読みの「品のわるさ」であろう。クラブは、ロビー夫人が男性教授と知り合いだからというので勝手に生物学の知識を期待していた。だからこそ、期待が裏切られるとあらたな意味づけを行なうことになったのである。さらに、ヴァン・グリュック嬢の読みはクラブ全体の欲望の投影であることが示唆されている—デインの冷淡な態度を見たメンバーたちはかえって「彼女によろこんでもらいたいという願望」(214)をつのらせるのだ。人間関係の軸となるのは追従

である。一方、ロビー夫人は「なんてひどい人かしら！」と囁いている(214)。

“Xingu”の意味が判明し、自分たちの読みが破産したにもかかわらず、パリンジャー夫人はさらなる深読みをしてみせる。彼女は、ロビー夫人は「注意を引くためならどんなことでもやるひと」(227)と決めつけるばかりか、デインとふたりで「いまごろわたしたちのことを笑いのめしている」と想像する。「ロビー夫人が出て行くときに合図を送るのを見たと思った」というのである(228)。「見たと思った」のは不安による後知恵か錯覚かであろう。ふだん脇役にすぎないレヴェレット夫人が「遅ればせながらそこにいない人たちを公平に扱いたいという衝動にかられて」会長の深読みを冷静に諫めるからである—「でも、いいですか、私たちは Xingu がどれほどすばらしいかをずっとデインに話していたし、あのひともそれをもっと知りたいといいました」(228)。たしかにデインは「もう少し Xingu のことでお聞きしたいことがあります」とロビー夫人に高らかに呼びかけていた(221)。レヴェレット夫人は、このデインの台詞とそれにあたえた自分たちの言葉の効果を素直に受けとれば、デインが好奇心にかられてロビー夫人の後を追ったのは疑うべくもないといいたいのである。それまでの深読みが破産した以上、たしかにそう読むほかないだろう。

欲望や不安にとらわれているために生じる事実の歪曲、自分の発した言葉の再現不能性や他人によってなされる予想外の解釈—これらはふだんわれわれの身の回りで起こり、またみずから経験するところでもある。スノッブ女たちの示す(深)読みには、このような言葉のやりとりの論理と生理とがたくみにしるされている。

3

すでにみたように、この作品では「読むこと」が重要な機能をはたしている。ここではメンバーが本の読み方で書き分けられていることをみてみよう。読書法別スノッブ・リストが尽くされているわけではないにしても、典型的なタイプは揃っているように思う。

ロビー夫人は、小説の結末に幸福な結婚を期待しながら流行おくれのトロロープを楽しむ読者である(211)。本を水浸しにしたことを恥じて悔いてもいないから、彼女はクラブのなかで書物崇拜とも知的スノビズムとも縁のな

い唯一のメンバーである。夫人の役回りからすれば、ウォートンはこうした素朴な大衆的読者を肯定しているように思われる。

読書法でロビー夫人と対照的なのがバリンジャー夫人である。ランチ・クラブの会長たる彼女は「最新の本」(the Book of the Day)の収集に励み、「最新の思想」(the Thought of the Day)に遅れずについてゆくことを誇りとしている(213-4)。ウォートンはこの女性の知性を諷刺している—それは「短期滞在客のように事実がたえず出入りするホテルであって、客は住所を残さず、食費を払わないことがよくあった」(214)。流行の本を追いかけるだけで、どんなテーマにも腰をすえてとりくむことのできない読者である。じっさい、彼女はデインの作品についていかなる知的興味も示してはいない。歓迎の日、バリンジャー夫人のテーブルには一昔まえのマルクスが最新のベルグソンと、『アウグスティヌスの告白録』がメンデル遺伝学にかんする最新の研究書と肩を並べている(214)。どんな議論にも対応できるようにとの配慮から、古い本を家の奥から探し出してきたものとみえる。

収集家ではないが、これと似ているのがレヴェレット夫人である。彼女は「ほかの会員の自己満足を映す鏡」としてロビー夫人について低く見られており、自分でも劣等感を抱いているので、人の尻馬にのって意見を述べることもしかできない。それは「最初にえらんだスタイルが気に入ってもらえなければ、ほかのいろんなものを出してみせる人のいい販売員」にたとえられている(211)。彼女はバリンジャー夫人の書棚を見ると、「夫人にならない息を切らして渡らねばならぬあらたな知識の分野」を目の当たりにした気がして「落胆する」(214)。

笑いを誘うのは、レヴェレット夫人が「実用のためというより安心するために」(213) *Appropriate Allusions* という引用句辞典を肌身離さずにいるという設定である。議論の席で役立てようと予習してもいつも機会を逃してしまうのだが、今日ばかりは「この辞典を完璧にマスターしても冷静でいられるという保証はなかっただろうと感じた」。というのは、かりに奇跡的に引喻をひとつ思い出したとしても、たぶんオスリック・デインが別の辞典を使っていることに気づくだけだろうし(レヴェレット夫人の信ずるところでは、文学者というのはいつも辞典を持ち歩いているものである)、結局こちらが何を引用したのかわ

からないだろうからだ」(213)。まえの会合の席でグライド嬢のくだす術学的知識にたいし「何のこと？詩なの？」「だれのこと？」(212)と隣のプリンス夫人にそっと尋ねることからすると、彼女はロビー夫人に“Xingu”の意味を問うことのできた唯一の人物、ロビー夫人と同質の率直さと無邪気さをもった唯一のメンバーである。しかし、彼女もスノビズムの圧力に染まったのであろう、そうした疑問を洩らすことはない。

レヴェレット夫人の辞書依存は彼女だけの専売特許というわけではない。クラブは「『ブリタニカ百科事典』、『読者案内』、『スミス古典辞典』であらかじめテーマについて調べておくこともある」し(216)、会合のあと、各自帰宅してから調べ物をすることもある(225)。ウォートンは、彼女たちの教養の実体がつけ焼刃の知識の断片でしかないことを語る—「不意を打たれた場合、クラブは不可知論を初期教会の異端説であるとし、フルード(Froude)教授を有名な組織学者(histologist)であるとする」といった勘違いを露呈する。“historian”と“histologist”を混同している点で、ほかのメンバーたちは「翼手竜」にかんするロビー夫人の間違いを笑うことはできないはずである。

グライド嬢は書物によって得た知識の量では他を圧倒しているようにみえる。が、比喩を駆使し、ささいな知識を持ちだすことで、肝腎な内容はかえって曖昧なものになる。彼女によると、デインの『死の翼』の魅力は「結末のつけ方がだれにもわからないことです。オスリック・デインは自分のいいたいことがひどく意味深いのに打ちのめされて、それに慈悲深くヴェールをかけました—もしかすると本人にも見えないように。ちょうどアペレスがイピゲネイアの犠牲を描くときにアガメムノンの顔にヴェールをかけたように」(212)。その作品が芸術的にすぐれているのは「ルパート王子の黒の手法を思い起こさせる」「暗い絶望感—黒に黒を重ねる驚くべき色彩設計」(212)による。だが、ロビー夫人の発した“Xingu”はグライド嬢のペダントリーをまったく機能させない。彼女はそのせいで「人生がすっかり変わった例を知っている」とありきたりのことを口にするしかない。興味を引くのは、ロビー夫人がデインとのやりとりで“pedantic”という言葉を用いていることだ。“the Xingu”と定冠詞をつけた表現を問いただされて、「たしかにちょっと学者ぶってるわね？私自身はいつも定冠詞を落とします。でもほかのメンバーがどう思うかわかりません」と笑いな

がら答える場面が出てくる(219)。このとき彼女が揶揄しているのは、「pterodactyl」をめぐる一件やグライド嬢の台詞に典型的なスノビズムの一面、意味のないペダントリーである。

ランチ・クラブのスノビズムを凝縮して示すのはプリンス夫人である。夫人の行動原理は知的好奇心や向上心ではなく、みずからの屋敷や財産の大きさをそれとなくアピールすることであり、つまり彼女はもともと古典的な意味でのスノッブである。プリンス夫人は、会長よりも彼女の屋敷の方が「有名人の歓迎の場として魅力的」(211)と考える会員たちの意見を自分でも口にする。レヴェレット夫人の上記の質問には「調べなさい、私はいつも調べることにしているの」と勉強熱心な態度で答えるが、その口調は「私なら下男に調べさせることくらい何でもないけれど」(212)というメッセージを伝えている。まえの会合でロビー夫人がプリンス夫人を激怒させるくだりは、クラブのスノビズムとロビー夫人の位置を端的に示す。プリンス夫人は、オスリック・デインは『死の翼』の準備に十年かけたらしいが、綿密な調査では自分も負けないと自慢をはじめ。そのときロビー夫人が質問する一「『死の翼』についてあなた自身はどう思いますか」(212)。この問いにたいする答えは返ってこない。すでにふれたように、「それはルール違反といえるような類の質問」だからである。プリンス夫人にとって「本が書かれるのは読んでもらうためである。読んでしまえばそれ以上何が求められるというのか。本の内容について事細かく訊かれるのは、税関で密輸品の紐がないか調べられるのに劣らぬ重大な侮辱行為に思われた」(213)。ロビー夫人の質問は邪気のないものである。そのためかえって、バリンジャー夫人やプリンス夫人が世間の評判を持ちだして自説を示さぬことと対照をなす。プリンス夫人にとってクラブは自己の地位や財産を顕示する場であり、読書もその手段のひとつにすぎない。ウォートンは、プリンス夫人の「特異な性質」(idiosyncrasy)をも尊重するという一見寛容な「ランチ・クラブの暗黙のルール」が拝金主義にもとづいていることを諷刺している。「プリンス夫人の頭の中には、その屋敷のように不朽の『調度品』が備えつけられており、その位置を乱してはならない」(213)とメンバーたちは考えている。ロビー夫人の率直な問いは「調度品」の位置を攪乱(disarranged)することになったのである。

では、小説家デインについてはどうであろうか。クラブの歓迎に「みずから歩み寄ろうという気はなく」、「無理やり連れてこられたようす」(215)を示していたデインは、ロビー夫人の発した“Xingu”にとまどう。態度が一変するのは、先に引用したロビー夫人の、源をつきとめるのを女性はやめた方がいいという台詞を聞いてからである。ほかのメンバーたちが不愉快になるのにたいし、彼女だけは「冷たい顔つきが突然やわらいで、これ以上ないほど暖かみのある人間的共感を示す表情になった」(220)。いよいよ自分の小説が議論されるときになったと知ると、彼女は座っていたソファから立ち上がり、啞然とする女性たちと「切符に鉄を入れる鉄道の車掌の機械的な迅速ぶり」(221)で握手し、ロビー夫人に同行を求めて後を追いかけてゆく。ランチ・クラブの歓迎に好ましからざるスノビズムを感じとっていたのかー彼女の内面についてウォートンは立ち入っていないのでわからない。けれども、上品ぶるメンバーとはことなり、いかがわしい(と想像される)ことに率直かつ人間的な興味を示す点でデインはロビー夫人と共通している。この女性小説家の姿には、周囲のスノビズムに反発し素朴な読者に親近感をいだくウォートンの感情の反映を読みとることが可能かもしれない。興味深いことに、デインのような経験がウォートンの身近にあったと想定できる記述がこの作品の数年まえに書かれたエッセイに出てくるのである。

ウォートンは「読書という悪徳」(“The Vice of Reading,” 1903)のなかで、読書は美德であるという錯覚にもとづいて本を読む人々を「機械的な読者」(the mechanical reader)と呼び、彼らが文学にいかにより有害な影響をあたえているかを論じている。すなわち、こういう読者は、想像力豊かな作家を機械的な生産へと駆り立て、時間のなかで成熟する真の教養を阻害し、芸術と道徳とを混同した評価を持ちこみ、さらに作品を内容の要約に還元する批評家をはびこらせる一要するに、自分たちに似た素人を文学の世界に生産することになるというのである(UCW, 104-5)。⁵ その特質にはランチ・クラブの女性たちを髣髴とさせるものがある。

もっぱら通俗大衆小説を好む人々とはちがい、「機械的な読者」は「書かれているものすべてに追いつくこと」(UCW, 100)を第一の動機とし、「うわさになっている本なら何でも読むことを義務と考えている」(UCW, 102)。彼ら

にとって「いったん読みおえた本は、成長し、根を張り、枝をからみあわせるものではなく、地質学者の棚の抽斗にラベルを貼りつけてしまいこまれる化石、いやむしろ、終身刑で独房に閉じ込められている囚人のようなものである」(UCW, 102)これはバリンジャー夫人の読書の仕方である。また、本には「楽しみをもとめない」(UCW, 211)と断言し、“Xingu”にいかがわしい意味を感じとるプリンス夫人の姿はまさしく、小説をそこに提示された出来事の道徳的意味からしか評価できない読者である。ことさら難解な話し方をするグライド嬢には、「明白なものを理解するという俗物的な気晴らしに飽きて、『秘められた苦いもの』のあいだを大胆に縫うようにすすむ」(UCW, 103)読者の面影が認められよう。もっとも、このタイプは数が少ないので実害はないとされている。これら「機械的な読者」と対照をなすのは呼吸をするように本を読む「生まれつきの読者」(the born reader)である。あいにくロビー夫人はこのタイプではない。彼女はむしろ、次に引用する「無情な人々」のひとりである。

評判になっているあらゆる本について意見を述べなくてはならないという義務感のせいで、他人の意見を拝借するという、非難に値するけれども自然な習慣が生まれた。機械的な読者のグループは決まり文句をお互いのために融通しあい、意見を借用しすぎて急速にすすむ腐食と歪曲をこうむる。だれであれこうした読者グループに出入りするひとならこのありさまにすぐ慣れるものである。知られているように、無情にも機械的な読者の不意を打ち、あなたのご意見をうかがいたいと嬉々として申し出た人々がいる。結果によって仮説の正しさが証明されることがときどきあるのは認めなくてはならない。この仮説とは、人をからかう場合、少し残酷さを加えたものがいちばん楽しいということだ。(UCW, 103)

ロビー夫人はプリンス夫人をからかおうとして『死の翼』にかんする意見を訊いたわけではない。何度も述べるように、彼女は娯楽として小説を読む素朴な読者であり、デイン歓迎会で優位に立つことができたのも、決まりごとに支配されない無邪気さゆえである。もっとも、この無邪気さは言葉の巧みな使用と矛盾するものではない。

以上は、作品を何度も読んで理解を深めた(つमり)の読み手によるものである。ここでははじめて作品を読んだときの解釈上の誤りはもちろん、当惑や疑問や興奮などの感情は極力排除され抑圧されている(「はじめて」を厳密に考えることは措く)。論を立てるとはふつうそういうものだが、しかし“Xingu”の場合、読み手の「初体験」を不問に付すことは可能であろうか。というのも、辞書や事典を引かないかぎり、大多数の読者は諷刺されるスノブ女たちとおなじ立場におかれるだろうからである。落語との比較がここでも役に立つ。落語では、「転失気」にみられるように、キーワードの意味は開口まもなく観客に明かされる。観客はこれにより登場人物の滑稽さを笑うことができる。一方、この作品の場合、タイトルの意味は結末近くまで明かされない。ロビー夫人以外のメンバーおよびデインと同様に、英米のほとんどの読者にとって“Xingu”は文字としても音としても奇異な言葉であろう。はじめてこの作品を読むひとは“Xingu”の情報量にかんしてランチ・クラブのメンバーとおなじ位置に立たされることになる。その言葉がロビー夫人の口から発せられてから読者が味わう不透明感、居心地のわるさは、諷刺される女性たちのそれとあまり変わらないだろう。事典によって意味が判明するという設定は、スノブな読者の不安をあるいは緩和してくれるかもしれない。

作品を読みすすめるときの読者の声を作者がメタレベルで書き写したとも解釈できる箇所がある。すでに引用した箇所だが、注目したいのは括弧付きの表記である。

“And deep in places,” Mrs. Roby pursued; (so then it was a book!) (219)

「すると本だったのか！」という内心の声を発した人物の名はしるされていない。したがって、作品内の文脈ではロビー夫人以外のメンバーの声だが、メタレベルでは、彼女たちとおなじく夫人の言葉を手がかりに“Xingu”の意味を探ろうとする読者の声が重なってくるだろう。はじめてこの箇所を読むひとは、自分の内心の声がそこに言語化されているのを読むことになるのではな

だろうか。あるいは、それを読むことで内心にひびく声に気づくといったらいいたろうか—これは危険な深読みであろうか。短篇“Xingu”は言葉の遊戯という点でも小説的な仕掛けという点でもたいへん愉快的な作品なのである。

注

¹ *Edith Wharton: The Contemporary Reviews* (Cambridge: Cambridge University Press, 1992), 227-37. 掲載されている六紙のうち肯定的な評価については 227, 229, 231-2, 233 を、否定的な一紙については 236 を見よ。

² 使用テキストは、Edith Wharton, “Xingu,” in *The Collected Short Stories of Edith Wharton*, 2 vols., ed. R. W. B. Lewis (New York: Charles Scribner's Sons, 1968), vol. 1, 209-29 により、引用頁は本文中に括弧で示す。なお、この作品の初出は 1911 年 12 月の Scribner's Magazine.

³ 興津要編『古典落語(上)』(東京: 講談社、1972)、182-8.

⁴ 加島祥造『アメリカン・ユーモア』(東京: 中央公論社、1990)、92.

⁵ テキストは Edith Wharton, *The Uncollected Critical Writings*, ed. Frederick Wegener (Princeton: Princeton University Press, 1996) により、引用頁は本文中に括弧で示す。